

新購入主要文献解題

(岩崎豊太郎)

ロマン主義文学全集

1. 文献名：『ロマン主義文学全集1789-1834年』第8集
Revolution and Romanticism, 1789-1834. 8th Ser. 18 Vols.
2. 著者：Edited by Jonathan Wordsworth
3. 出版社：Woodstock Books, GBR
4. 出版年月：2000年～2002年

本ファクシミリ・リプリント全集は、フランス革命の勃発（1789年）から英国の代表的なロマン派詩人コールリッジの死（1834年）の間に発表されたロマン主義時代の重要文献のうち、現在入手が困難なものを収録しているフランス革命200周年記念出版物であり、1989年の「第1集」以来、今回の「第8集」まで刊行されている。

本復刻シリーズ全集は、ロマン派詩人・作家の代表的な作品のみならず、フランス革命という政治的
事件の影響を多大に受けて、ロマン主義的思潮によって支配された、当時の思想的潮流の全貌にも光をあてるために、政治・歴史・心理・科学的進歩・女性の役割や教育・人間と環境など、ロマン主義時代の精神を伝える諸文献を網羅し、また各タイトルに貴重な解説を添えたコレクションとして企画されている。

この「第8集」には、次の文献を含めた18タイトルが復刻された。

Jacques-Pierre Brissot de Warville, *New Travels in the United States of America*. 1792. 500 p.

J. W. Goethe, *Iphigenia in Tauris*. 1793. 140 p.

Mark Akenside, *The Pleasures of Imagination*. 1795. 216 p.

Constantin Volney, *The Ruins*. 1795. 256 p.

Uvedale Price, *On the Picturesques*. 1796. 448 p.

Erasmus Darwin, *A Plan for the Conduct of Female Education, in Boarding Schools*. 1797. 144 p.

Percy Bysshe Shelley, *Epipsychidion*. 1821. 44 p.

The Cultic Milieu : Oppositional Subcultures in an Age of Globalization

Jeffrey Kaplan and Heléne Lööw (eds.), AltaMira Press, 2002.

「カルト界：グローバル化時代の対立的サブカルチャー」（2002）は、宗教社会学、サブカルチャー研究、文化研究、若年者文化、新しい社会運動などの分野に興味のあるものならば一度は目を通しておきたい文献の一つである。「カルト界(cultic milieu)」という用語は英国の社会学者コリン・キャンベル

によるものであるが、本書におけるその意味は秘教的信仰という宗教的性格を持つ集団にとどまらない。その射程はずっと広く、明確な信念を持つ政治グループや、とりわけ一九六〇年代以降の対抗文化として神秘主義思想、「東洋」礼賛主義、オカルト、心霊現象、ニューサイエンス、シャーマニズム、自然主義、瞑想など、いわゆる「近代の物質文明」に対立した信念やそれに基づいた実践や運動も含んでいる。この文化的潮流の裾野は広く、オウム教などのようなカルト宗教団体のみならず、現在では映画・アニメ・マンガなどのポピュラー・カルチャーを通じて日常生活に浸透している状況がある。したがって、事例研究として選択されている様々な政治的・文化的集団や現象は「単なる変人の集まり」として外部化できない側面があることにわれわれは気がつくのである。本書における諸事例は、ラディカル政治集団、ゴシック・サブカルチャー、ラディカル・エコロジスト運動、ネオナチ、ニューエイジ・サブカルチャー、反カルト運動など多様であり、これらの現象が反グローバル運動と共通点が多いことなど、グローバル化という現代的コンテクストでの考察となっている。

そして、本書のすぐれているところは、政治的左右の対立図式を超えた相同性（ラディカルな信念や運動における「純正」概念への執着など）や対抗文化の「両刃の剣」的な性格という複雑な局面にも注目しているところである。対抗文化は、新しい社会のオルタナティヴを創造したりもするが、一方で閉鎖的な信念や逸脱に収束していく側面もある。これからのサブカルチャー研究や文化研究、社会変動などの考察に欠かせない視点に気づかせてくれる文献である。

(笠間千浪)

福沢諭吉年鑑 1～22

社団法人福沢諭吉協会・非売品

1974年～1995年

福沢諭吉協会発行の同協会会員のみ配布される

福沢諭吉についての

- I 福沢諭吉関係新資料
- II 福沢諭吉研究論文
- III 再録福沢諭吉研究論文
- IV 福沢研究文献目録
- V 土曜セミナー他講演記録
- VI 書評
- VII 研究文献案内

等の内容からなる。(年度により上記I～VIIの出入りがある)

福沢諭吉研究の基本的研究文献ともいえるものである。

(鈴木修一)

近代海外留学生史 上／下2巻

渡辺 實著・講談社・1977年

日本の近代化にあたって、幕末・維新时期そして明治から大正にかけて欧米に送られた留学生の果たした役割は非常に大きなものがあったが、その留学生の歴史についての概観的な通史。

概観的な、とは言っても、上下二巻合わせて1,000頁を越える大冊で、以下のような内容構成になっている。

- 第一編 総説
- 第二編 黎明期の留学
- 第三編 幕末期の留学
- 第四編 明治前半期の留学（明治元年～明治28年）
- 第五編 明治後半期の留学（明治29年～大正元年）

この書が出版されて30年近くになり、個別的な留学生の研究は各分野で大きく進んでいるが、特に明治期全般にわたる留学生史については、未だこれを越える通史は出ていない、と言ってもよいだろう。

(鈴木修一)

特命全権大使米欧回覧実記 全5巻

水澤周現代語訳及び注

慶応義塾大学出版・2005年5月

『特命全権大使米欧回覧実記』（久米邦武編著）は、現在、岩波文庫で容易に入手できるが、その原文を辞書その他参考書の助けを借りずに読むことは、研究者といえども簡単ではないであろう。本書は水澤氏により、丁寧な現代語訳化され、訳注が付されて見事に現代によみがえられていると言えよう。

この書の研究も近年、欧米の研究者たちの注目により、大使一行が、滞在した国々の人により個別に進められているが、われわれ日本人としては、彼らの視点とは異なるとは言え、先ず、このテキストを通覧することが先決であり、そのための強力な助けとなること間違いなし、と思われる。

(鈴木修一)

Die Iwakura-Mission

Peter Pantger. IUDICIUM Verlag GmbH München 2002

本書は久米邦武編著『特命全権大使米欧回覧実記』全5巻全百章のうちの、ドイツ語文化圏（ドイツ・オーストリア・スイス）の部分についての、ドイツの研究者たちによる、ドイツ語訳、及び注と参考資料よりなり、600頁を越える大冊である。

副題として

Das Logbuch des Kune Kunitake
über den Besuch der japanischen

Sondergesandtschaft in Deutschland, Österreich und der Schweiz

in Jahre 1873

が付されており、編訳者として上記にP.Pantzer氏を揚げたが実際は同氏がリードして、M.Eichhorn、K.Hilker、L.Narangoa、M.Schrimpfとの共同作業によるものである。

冒頭に「北海道大学名誉教授田中彰先生に心からの感謝を込めて捧げます」との献辞がかかげられている。内容は久米のテキストから、ドイツ、オーストラリアスイスについての部分の独訳及び詳細なドイツ語文化圏の研究者ならではの考証され訳注(S.1～S.442)の他、資料編(S.443～S.502)年表(S.503～S.509)

人名地名の和欧の表記一覧、文献等から構成されている。

(鈴木修一)

『コレクション・モダン都市文化』第二回配本

和田博文監修 ゆまに書房 2005年4月刊

本書は、文学・美術・映画・演劇・経済・商業・建築・交通・スポーツ・ファッションなど、多面的な視点から1920年代～1930年代のモダン都市文化の魅力を把握する叢書です。全20巻がテーマごとの編集になっており、このうち第一回配本は第6巻から第10巻までの購入である。その5巻の内容は、「丸の内のビジネスセンター」「円タク・地下鉄」「デパート」「競技場」「広告と商業美術」となっている。ちなみに第二回配本は、「銀座のモダニズム」「ファッション」「築地小劇場」「ダンスホール」「モダン都市景観」であった。巻末には、詳細な解題・エッセイ・関連年表・主要参考文献が収録されており、テーマの追求がより深く探求されるよう配慮されている。図版も豊富で、モダニズム研究に必須の文献である。それぞれの研究テーマに応じて活用されたい。

(日高昭二)